



ISSN 2185-9787

さやばね

ニューシリーズ

No. 37

March 2020

日本甲虫学会

SAYABANE N.S.

The Coleopterological Society of Japan

甲虫と人類の文化—テントウムシ科の文化昆虫学概説

高田兼太

〒693-0021 島根県出雲市塩冶町 913 めぞん一刻館 202 (e-mail: athemus99@yahoo.co.jp)

Beetles in Our Culture – A Review of Cultural Entomology of Coccinellid Beetles

Kenta TAKADA

Summary. This paper is a mini review of cultural entomology of coccinellid beetles. Due to their lovely roundish shapes as well as their feeding habit on some agricultural pests (like aphids), coccinellids are well known in different cultures. Especially in the western countries, coccinellids have been frequently mentioned in folklores as a symbol of good luck or sacredness. In association with such a symbolism, coccinellids are picked up as a model of designs for a variety of goods, and are used for other cultural media. In Japan, too, coccinellids are very popular insects, giving their good image to general public. This paper will discuss the way coccinellids have come to be a relevant topic of Japanese popular culture.

はじめに

文化昆虫学とは、人々に対する昆虫の影響や、昆虫に対する人々の認識について研究することを目的とする比較的新しい学問分野である (Hogue, 1980, 1987; 三橋, 2000; 小西, 2003; 高田, 2010a, 2014). 文化昆虫学的な視点から人間社会を見渡すと、人間社会における昆虫の役割は極めて多岐にわたりかつ多様である (Hogue, 1987; Kellert, 1993). 昆虫が人々の文化事象に表象するのは、人々が自然から様々なインスピレーションを受けた結果であろう。したがって、文化昆虫学の視座は、昆虫に対する人々の自然観を理解するうえで重要であり、昆虫学に関する教育や保全生物学などの分野への応用が期待される (例えば, Takada, 2013a, 2013b).

近年では、文化昆虫学の分野において、特に甲虫がかかわる文化事象に注目が集まりつつある (例えば, 高田, 2010a, 2010b; 2011; Hoshina & Takada, 2012; 保科, 2013). 甲虫目は、昆虫の中でも形態や生態において圧倒的に多様性が高いことから、

人類によって多様な価値観が見出され、様々な文化事象に表象している。一方で、各甲虫目に属する分類群の知名度には偏りがあり、ごく一部の分類群に人気が集中していることも示されている (高田, 2010a, 2010b; Takada, 2010). しかしながら、このような甲虫に対する人々の認識や甲虫が表象する文化事象のあり方については、その研究事例もまだ少なく、十分に解明されているとはいいがたい。甲虫に対する人々の認識や甲虫がかかわる文化に関する諸問題を解決するには、甲虫目は多様な分類群を含むという理由から、まず甲虫目に属する各分類群の文化甲虫学に関連した知見を個別に整理した上で比較検討することが必要と思われる (高田, 2010b).

本報告文は、テントウムシ科 Coccinellidae の文化昆虫学の概説である。テントウムシ科は、甲虫の中でも人間の文化に大きな影響を与えた分類群のひとつに数えられていることから (高田, 2010a; Takada, 2010), 人間社会におけるテントウムシ科の役割を調べることは極めて重要であると考えられ

る。また、現在までにテントウムシ科に関連する書籍や論文は多く出版され、それらにおいてテントウムシ科の文化昆虫学に関する知見が散見される。しかしながら、テントウムシ科に関する文化昆虫学に関する知見は、体系的に把握されていないのが現状である。

なお、筆者はこれまでに「甲虫と人間の文化」シリーズとして、コガネムシ科（高田，2010b）、およびホタル科（高田，2011）の文化昆虫学概説論文を発表してきたが、本報告文はこれらシリーズの第3報に相当する。本報告文においても、「文化昆虫学」の定義は、Hogue（1987）が定義したもの（原義）よりも、三橋（2000）や高田（2010a, 2010b）が提唱しているものに近く、知的営為のための昆虫の利用を文化昆虫学の主な対象としつつも、生活手段としての昆虫の利用も文化昆虫学の範囲に含めていることはこれまでの同シリーズの報告文と同様である。

本論文は既知のテントウムシが係わる主に日本の大衆文化を中心にとりまとめた概説論文であるので、本論文を起点にテントウムシに関する新しい視点からの文化昆虫学的研究が誘導されれば幸いである。筆者自身は、「昆虫の多様性が一般の人々にどのように認識されているのか」に着眼点において文化昆虫学の研究を進めているので、テントウムシが表象する文化についても同様に、今後その多様性に対する人々の認識について調査を進める予定である。

テントウムシ科の生物学

テントウムシ科 Coccinellidae は世界から約 6,000 種、日本では約 180 種が知られており（阪本，2018）、多くはアブラムシ等を食べる捕食性であるが、植食性や菌食性の種も少なくない（佐々治，



Fig. 1. ナナホシtentウの生態写真.

1985; LeSage, 1991; 阪本，2018）。テントウムシ科の生息環境は広く、草地から森林あるいは自然環境から人間の居住区にまでおよぶ（Yurtsever, 2001; Kuzenetsov & Zakharov, 2001）。なお、一般にはナナホシtentウ *Coccinella septempunctata* のようにテントウムシ科は派手で目立つイメージが先行しているが（Fig. 1）、実際には体色が黒色で体長が 1 ~ 3 mm 程度の目立たない種類が多い。

人間の生活手段とテントウムシ

テントウムシ科は、人間の生活手段に深くかかわっており、とりわけ農業や園芸とは縁が切れない存在となっている。テントウムシ科は、農業・園芸害虫であるアブラムシやカイガラムシを食することから益虫として注目されており、そのうち一部の種類は生物農薬として実際に生物防除に利用されている（Clausen, 1954; 佐々治，1985; LeSage, 1991; Gorden 1992, エヴァンス & ベラミー，2000; 小西，2007; Waldbauer, 2009）。例えば、日本においては、ベダリアtentウ *Rodolia cardinalis* は、柑橘類の害虫であるイセリアカイガラムシ *Icerya purchasi* を防除する目的で 1911 年に生物農薬として導入され、成功をおさめている（佐々治，1985）。また、遺伝子操作によって作られた翅のないナミtentウ *Harmonia axyridis* が、「ナミトップ」という商品名で生物農薬として販売されている（Agriseet, 2007）。これらに加え、土着のテントウムシが棲みやすい農地環境を作ること、農業害虫の個体数を制御する試みも盛んに行われている。

一方で、オオニジュウヤホシtentウ *Epilachna vigintioctopunctata* のように、一部の植食性の種は農作物の害虫として知られている。また、ヨーロッパにおけるナミtentウのように、本来は外来の生物農薬として導入されたが、定着後に本来の土着の昆虫生態系を脅かす存在あるいは不快害虫として問題視されている例も存在する（Koch, 2003; Koch *et al.*, 2006; Adriaens *et al.*, 2008; Waldbauer, 2009）。

世界におけるテントウムシのイメージと知的営為にかかわる利用

テントウムシ科は、世界のいたるところで友好的あるいは幸運をよぶ昆虫として認識されている（Gorden, 1992; Majerus, 1994; 桜谷，1998; Kritsky & Cherry, 2000; 小畑，2009）。特に欧米（西洋文化圏）では、テントウムシ科の一般名称は ladybird あるいは ladybug（マリア様の箱船、聖母マリアの鳥）と

呼ばれ、中世のころより人気が高く神聖視された (Gorden, 1992; エヴァンス & ベラミー, 2000; 小畑, 2009; Waldbauer, 2009; 阪本, 2018). このように、欧米でテントウムシ科の人気が高く神聖視されるのは、ladybird の語源が「害虫を食べて聖母マリアに使える」の意とされるように、アブラムシを捕食するという食性が人間にとって役立つことによるところが大きい (小畑, 1998; 2009; Waldbauer, 2009).

テントウムシは、ヨーロッパを中心とした民族伝承によく登場し、その多くで幸運をよぶ昆虫あるいは神聖な昆虫として位置づけられている (小畑, 1998; 小畑, 2009; Kritsky & Cherry, 2000). たとえば、ドイツの民族伝承では、テントウムシは、コウノトリやハクチョウと同様に子供を運んでくるものとされている (Kritsky & Cherry, 2000). 北欧では、乙女が春にテントウムシを見たときに、手のひらをはわせて、「結婚式の手袋のために手の大きさを測っている」というと、幸運をもたらすと考えられている (Gorden, 1992). イギリスでは、テントウムシは人々を金持ちにしてくれる昆虫なので、殺すと不幸になるという言い伝えがある (Clausen, 1954; 小畑, 1998; Kritsky & Cherry, 2000). なお、このように幸福の象徴としてのテントウムシは、西洋文化圏にかぎらず、その他の地域の民族伝承にも登場するようである (小畑, 2009).

テントウムシについて特筆すべきことは、主に西洋文化圏で、幸運をもたらす昆虫とされていることに関連して、品目、大きさ、色、点の数、形などにおいて極めて様々なタイプのテントウムシ・グッズが作られていることである (小畑, 1998; 桜谷, 2009) (Fig. 2A–J). 桜谷 (2009) は、積極的にテントウムシ・グッズを調査しており、その結果見つけたテントウムシ・グッズの種類は、文房具 42 品目、衣類 22 品目、台所用品と食器 22 品目、リビング用具 14 品目、バス・トイレ用品 13 品目、アクセサリ 5 品目、生活用品一般 27 品目、おもちゃ 6 品目、お菓子 2 品目におよぶ。テントウムシ・グッズの特徴としては、赤色やオレンジ色系のものが多くあげられる。

また、テントウムシは、テントウムシ・グッズにかぎらず、商標、ロゴ・マーク、シンボルなどのデザインやモチーフとして使われるほか、美術品や文学、詩歌、童謡、物語 (アニメーション) にも登場する (Leskosky & Berenbaum, 1988; 桜谷, 1998; Coelho, 2000; エヴァンス & ベラミー, 2000; 小西, 2003; Dicke, 2004; Coelho, 2004; 宮ノ下, 2005; 小畑, 2009; 桜谷, 2009). たとえば、イギ

リスの児童図書出版社「Ladybird」の商標のイメージはテントウムシである (小畑, 1998; 2009). ラトビアでは、国を象徴する昆虫としてテントウムシ (フタモンテントウ *Adalia bipunctata* (Linnaeus)) が指定されている (The Latvian institute, 2006). テントウムシにまつわる音楽としては、オーストリアのヨハン・シュトラウス Jr. (Johann Strauss, Jr.) 作曲の「てんとう虫」があげられる (小西, 2003). 戯曲「ロミオとジュリエット」ではテントウムシが親愛をあらわすものとして使われている (エヴァンス & ベラミー, 2000). また、CG アニメーション映画である「バグズ・ライフ」(1998 年) には、テントウムシが物語の主軸を担うサーカス団の一員として登場する (宮ノ下, 2005; Disney/Pixar, 1998).

日本のテントウムシ文化

1. 日本国内におけるテントウムシの人気とその時代変遷

日本でもテントウムシは、ひとびとの生活と比較的にかかわりが深い昆虫であり、その人気と知名度は高い (佐佐木, 1989; 齊藤, 1996; 桜谷, 1998; 2009). 事実、My Voice Communications, Inc. (2008) によれば、13,734 人を対象にしたウェブ形式のアンケート調査において好きな昆虫は何かという設問をもうけたところ、テントウムシは昆虫の中で 6 番目に人気のあるグループであった (得票率 3.3%). また、Takada (2010) は、Google の検索数を用いて甲虫に属する分類グループの知名度を調べ、テントウムシがホタルやカブトムシに次いで知名度が高いことを示している。

ただし、テントウムシは古典にはあまり登場しないことから (佐佐木, 1989)、日本国内でテントウムシの人気や知名度が高まったのは、ごく最近のことであると思われる。このことは、俳句の時代変遷からも見て取れる。例えば、遊磨 (2004) の昆虫俳句作品の時代変遷データが示すように、テントウムシは江戸時代生まれの俳人による俳句作品には登場せず、明治時代以降に生まれた俳人により季語として用いられはじめられている。これは、テントウムシの人気と知名度が明治時代頃から高まったことを暗に示すものであろう。ちなみに、明治時代は日本社会の欧米化が進むとともに、日本国内に西洋科学や生物防除の知識が浸透した時代でもある (瀬戸口, 2004; 上田, 2004a, 2004b). テントウムシの人気と知名度が日本で高まったその背景には、日本文化の欧米化が関係しているのかもしれない。



Fig. 2A-J. 色々なテントウムシ・グッズ。A, テントウムシの修正テープ; B, テントウムシのノート (写真提供: 青木一幸氏); C, テントウムシの貯金箱 (写真提供: 多田裕巳子氏); D, テントウムシのストラップ (写真提供: 奥田恭介氏); E, テントウムシのリストバンド; F, テントウムシのハンドモップ; G, テントウムシのブローチ; H, テントウムシの切手; I, テントウムシのマグカップ; J, (番外) テントウムシの滑り台。

なお「テントウムシ」という言葉は、小野蘭山の本草綱目啓蒙 (1800 年代はじめ) にはじめて登場する。それまでは、漢語由来の瓢虫 (ヒョウチュウ・ひさごむし) と呼ばれていたようである (小畑, 1998; 2009)。テントウムシの語源には諸説あり、一般には単に「てんとう」は太陽をさすものと解釈されるが、テントウムシは神様の虫の翻訳であるとも考えられるという。これは、日本の戦国時代にキリシタンが旧約聖書の神エホバの日本語訳として「てんとう」という言葉を採用したことになむ考え方である (小畑, 1998; 2009)。

2. 日本におけるテントウムシのイメージと知的営為にかかわる利用

テントウムシは、日本でもそのポジティブなイメージに関連して、アクセサリや装飾品、あるいは陶磁器や日用雑貨のデザインやモチーフとしてよく用いられているほか、いくつかの地方では郷土玩具としてのテントウムシ・グッズも見られる (齊藤, 1996; 桜谷, 1998; 2009)。日本においてテントウムシ・グッズがきわめてポピュラーであることは、ホームドラマ系の漫画「マイガール」(佐原ミズ作) において、主人公とヒロインを結びつけたきっかけがテントウムシ・グッズであったことから伺い知ることができる (佐原ミズ,

2007–2010)。

また、テントウムシはグッズにかぎらず、商品のレーベルや会社の商標、ロゴ・マーク、シンボルなどのデザインやモチーフとしても比較的良好に用いられている。たとえば、テントウムシを用いた商品レーベルの例としては、小学館の「てんとう虫コミックス (http://www.shogakukan.co.jp/comics/series/_name_tc)」などがあげられる。

さらにテントウムシは、日本の様々な大衆文化メディアにも比較的良好に登場する。たとえば、特撮ドラマ「仮面ライダー・ストロンガー」に登場する「電波人間タックル」は、主人公とともに悪の組織と戦うヒロインであるが、そのモチーフはナナホシテントウである(たとえば、稲垣, 2003)。「デジモンアドベンチャー」には、テントモンと呼ばれるテントウムシをモチーフとした昆虫型デジタルモンスターが主要キャラクターとして登場する(Anonymous, 2009)。「ジョジョの奇妙な冒険(第5部)」の主人公ジョルノ・ジョバァーナは、テントウムシのブローチを好んで着用しているほか、彼のスタンド(特定の姿と特性をもつ超能力)であるゴールド・エクスペリエンスは、てんとう虫のシンボルをつけた人型スタンドである(荒木飛呂彦, 1996–1999)。ゲームでは、ポケットモンスターに登場するレディバとレディアンが、テントウムシをモチーフにしたモンスターである(Anonymous, 2009)。テントウムシが登場する歌謡曲には、チェリッシュの代表作「てんとうむしのサンバ」(1973年)があり、この歌は日本における結婚式の定番曲となっている(斉藤, 1996; 小西, 2003b)。また、テントウムシにまつわるそのほかの歌謡曲としては、Shaka Labbits の Ladybug や the pillows の Ladybird girl などがある(たとえば、NTT レゾナント, 2009)。加えて、テントウムシの影響は食文化にまでおよび、お菓子やパンのデザインにも使われている(Takada, 2013c; 保科, 2013)。さらに驚くべきことに、テントウムシはそのポジティブなイメージに反してか、男性用小便器の小便的として表象している事例まで存在する(Takada, 2014)。

文化に表象するテントウムシの特色

上述したように、テントウムシは、日本に限らず世界中で様々なグッズやロゴ・マークのデザインやモチーフとして用いられるほか、大衆文化を中心とした様々な文化事象に表象している。ただし、多くのグッズや文化事象に登場するテントウムシのイメージは、一部の種、特にナナホシテントウを連想させるものが多いように思われる。事

実、Gorden (1992) はヨーロッパにおけるテントウムシのステレオタイプとしてナナホシテントウをあげている。宮ノ下 (2015) は、テントウムシ関連の商品デザインの検証を行っているが、(1) 円形の体に黒い頭部と触角をもち翅に斑紋をもつ、(2) 赤い翅に黒い斑紋をもつ、(3) 斑紋数は7個の頻度が高い、(4) 左右対称の斑紋パターンをもつ、(5) 片翅3個の斑紋をもつ頻度が高いという特徴を示したとしている。また、宮ノ下 (2015) は、同時に大学生・専門学校生を対象とした自由にテントウムシの斑紋パターンを描いてもらうというアンケート調査を実施しており、斑紋の数が7つであるものの頻度が最も高いという結果が得られている。これらの結果からは、ナナホシテントウの特徴がデザインに反映された結果であるとともに、日本におけるテントウムシのステレオタイプもまたナナホシテントウであることが示唆される。

ナナホシテントウがテントウムシのステレオタイプとして認識されている理由としては、(1) テントウムシの中では大型であること、(2) 派手で目立つ色彩をしていること、(3) 人里近くにも生息していること、(4) 分布域が極めて広いことがあげられる。つまり、総じて人目につきやすい種であることによるところが大きいと思われる。これは、多くの人々が昆虫に対しては傍観者(Casual observer)的立場をとっているため、普遍的で目立つ種にしか目が向かないということであろう。

テントウムシの人気の秘密

これまでに述べてきたように、テントウムシは西洋文化圏やその影響をうけた日本社会において人気の高い昆虫である。テントウムシの人気の秘密は、先に述べたように農作物の害虫であるアブラムシを捕食するという功利主義的な価値基準によるところが大きい(小畑, 1998; 2009)、それだけではテントウムシの人気の高さを説明できない。

桜谷 (2009) によれば、テントウムシは一般に動物が「かわいい」と思われる要素を大きく満たしているという。その特徴として、(1) 体が丸みをおびている、(2) 配色が比較的単純である(また、派手で目立ち、きれいである)、(3) 危険ではないことに加えて、(4) ペットとして飼育されている、(5) 模様も丸い、(6) しぐさがおだやかであることがあげられる。したがって、かわいいという印象を受けるのはテントウムシの成虫に対してであり、成虫とかけはなれた形態をもつテントウムシの幼虫には同じような視線は向けられない(桜谷, 2009)。

テントウムシ文化のまとめ

テントウムシ科は、人間の生活手段に深くかかわっており、特に人間の農耕文化とは縁が切れない存在となっている。特に、テントウムシ科に属する多くの種は、農業害虫であるアブラムシやカイガラムシを食することから益虫として注目されている。そのことに関係して、テントウムシは、世界（特に西洋文化圏）のいたるところで好運をよぶ昆虫として認識されている。また、テントウムシは様々な民族伝承に登場するほか、品目、大きさ、色、点の数、形などにおいて極めて様々なタイプのテントウムシ・グッズが作られている。さらに、アクセサリーや工芸品、日用雑貨などグッズにかぎらず、美術品、ロゴ・マークなどのモチーフとして使われるほか、詩歌や童謡、物語（アニメーション）にもテントウムシが登場する。

日本でも、テントウムシはその益虫としてのポジティブなイメージに関連して人気が高く、アクセサリーや装飾品、あるいは陶磁器や日用雑貨のデザインやモチーフとしてよく用いられているほか、特撮ドラマやアニメ、音楽など様々な大衆文化メディアにも比較的良好に登場する。これらの事実は、テントウムシが日本の大衆文化によく根付いた甲虫であることを示しているが、このようにテントウムシのイメージが日本の大衆文化に浸透していった背景には、明治時代以降に進んだ日本社会の欧米化が関連しているものと考えられる。また、日本の欧米化に伴ってテントウムシのイメージが日本文化へ浸透していったとするならば、それはナナホシテントウの存在が大きく関係しているように思われる。事実、ナナホシテントウはヨーロッパにも日本にも共通して生息する上に、人々にとって目立つ種類である。その結果、テントウムシのステレオタイプとして多くの人々に受け入れられているようである。

ただし、これらの見解については定量的、客観的なものではないため、今後検証する必要がある。

謝辞

本報告を執筆するにあたって、以下の方々には英文の校閲、貴重な意見やアドバイスを、資料・文献をいただくなどのご助力をえた。心より御礼申し上げる（五十音順）：青木一幸氏（沖縄県）、生田省悟氏（新潟県新潟市）、市川和雄氏（日本医科大学）、岩西紗江子氏（島根県出雲市）、岩西哲博士（ホシザキ野生生物研究所）、奥田恭介氏（岐阜県昆虫分布研究会）、海原要氏（宮城昆虫地理研究会）、小路晋作博士（新潟大学）、多田裕巳子氏（大阪府大

阪市）、中山恒友氏（栃木県宇都宮市）。

引用文献

- Adriaens, T., G. S. Martin y Gomez, & D. Maes, 2008. Invasion history, habitat preferences and phenology of the invasive ladybird *Harmonia axyridis* in Belgium. *BioControl*, 53: 69–88. Article in [www: Agrisect, 2007. Nami-Top \(ナミトッ\). Agrisect. \[www document\]. URL http://www.agrisect.com/natural-enemy_nami-top.html](http://www.agrisect.com/natural-enemy_nami-top.html)
- Article in [www: Anonymous, 2009. 怪獣怪人モチーフ大百科. ウェブページ. \[www document\]. URL http://www.fusuian.tamom.co.jp/](http://www.fusuian.tamom.co.jp/)
- Article in [www: My Voice Communications, Inc., 2008. 自主企画 アンケート結果 \[11009\] 昆虫. – MyVoice. \[www document\]. URL http://www.myvoice.co.jp/biz/surveys/11009/index.html](http://www.myvoicecommunications.co.jp/biz/surveys/11009/index.html)
- Article in [www: NTT レゾナント, 2009. goo 音楽. – goo. \[www document\]. URL http://music.goo.ne.jp/](http://music.goo.ne.jp/)
- Article in [www: The Latvian Institute, 2008. Nasional symbols of Latvia. \[www document\]. URL http://www.li.lv/index.php?Itemid=414&id=14&option=com_content&task=view](http://www.li.lv/index.php?Itemid=414&id=14&option=com_content&task=view)
- 荒木飛呂彦, 1996–1999. ジョジョの奇妙な冒険 第5部 47–63巻. ジャンプ・コミックス, 集英社, 東京.
- Clausen, L. W., 1954. *Insect fact and folklore*. 194 pp. Macmillan, USA.
- Coelho, J. R., 2000. Insects in rock and roll music. *American Entomologist*, 46: 186–200.
- Coelho, J. R., 2004. Insects in rock and roll cover art. *American Entomologist*, 50: 142–151.
- Dicke, M., 2004. From Venice to Fabre: Insects in western art. *Proceedings of Netherlands Entomological Society*, 15: 9–14.
- Disney/Pixar, 1998. *A Bug's Life* (DVD Video).
- エヴァンス, S. R.・ベラミー, C. L. (加藤義臣・廣木真達訳), 2000. 甲虫の世界 – 地球上で最も繁栄する生きもの. 201pp. シュプリンガー・フェアラーク東京, 東京.
- Gorden, R.D., 1992. *Ladybird beetles*, pp. 24–27. Adams, J. (ed), *Insect Potpourri*, 336 pp. The Sandhill Crane Press, USA.
- Hogue, C. L., 1980. Commentaries in cultural entomology 1. Definition of cultural entomology. *Entomological News*, 91: 33–36.
- Hogue, C. L., 1987. Cultural entomology. *Annual Review of Entomology*, 2: 181–199.
- Hoshina, H. & K. Takada, 2012. Cultural coleopterology in modern Japan: the rhinoceros beetle in Akihabara culture. *American Entomologist*, 58: 202–207.
- 保科英人, 2013. アキバ系文化昆虫学～2次元世界の美少女の虫たちへの想い. 426 pp. 牧歌舎・兵庫.
- 稲垣栄洋, 2003. 仮面ライダー昆虫記. 197 pp. 実業之日本社, 東京.
- Kellert, S. R., 1993. Values and perceptions of invertebrates. *Conservation Biology* 7 (4): 845–855.
- Koch, R. L., 2003. The multicolored Asian lady beetle, *Harmonia axyridis*: A review of its biology, use in biological control, and non-target impact. *Journal of Insect Science*, 3: 1–16.
- Koch, R. L., R. C. Venette, & W. D. Hutchison, 2006. Invasions by *Harmonia axyridis* (Pallas) in the Western Hemisphere: Implications for South America. *Neotropical Entomology*, 35: 421–434.
- 小西正泰, 2003. “文化昆虫学序説”. pp. 1103–1104. 三橋 淳 (編), 昆虫学大事典. 朝倉書店, 東京. 1200 pp.
- 小西正泰, 2003. “美術・その他”, pp. 1107–1112. 三橋 淳 (編), 昆虫学大事典, 朝倉書店, 東京. 1200 pp.
- 小西正泰, 2007. 虫と人と本と. 創森社, 東京. 519 pp.
- Kritsky, G. & R. Cherry, 2000. *Insect mythology*. Writer Club Press, USA. 140 pp.
- Kuzenetsov, V. N. & E. V. Zakharov, 2001. Distribution of the lady

- beetles (Coleoptera, Coccinellidae) in plant formations in the Russian Far East. Sukunahikona, Special Publication of the Japan Coleopterological Society, Osaka, 1: 167–174.
- LeSage, L., 1991. "Coccinellidae". pp. 485–494. Stehr, F. W. ed., *Immature Insects Volume 2*, Kendall/Hunt Publishing, USA. 975 pp.
- Leskosky, R. J. & M. R. Berenbaum, 1988. Insects in animated films. *Bulletin of the Entomological Society of America*, 34: 55–63.
- Majerus, M. 1994., *Ladybirds*. Harper Collins Publishers, London. 345 pp.
- 三橋 淳, 2000a. 文化昆虫学とは. 遺伝, 54: 14–15.
- 宮ノ下明大, 2005. 映画における昆虫の役割. 家屋害虫, 27: 23–34.
- 宮ノ下明大, 2015. 暮らしの中のテントウムシデザインとは何か? その図像と鞘翅斑紋パターンの特徴. *Urban Pest Management*, 5: 61–67.
- 小畑晶子, 1998. テントウムシグッツ・コレクション. 昆虫と自然, 33 (4) : 26–29.
- 小畑晶子, 2009. “テントウムシの民俗学”. pp. 116–117. 日本環境動物昆虫学会・生物保護と環境アセスメント調査手法研究部会 (編), テントウムシの調べ方, 文教出版, 東京. 148 pp.
- 斉藤慎一郎, 1996. 虫と遊ぶ – 虫の方言誌. –. 大修館書店, 東京. 294 pp.
- 阪本優介, 2018. テントウムシハンドブック. 文一総合出版, 東京. 88 pp.
- 桜谷保之, 1998. 多彩な面を持つテントウムシ類. 昆虫と自然, 33 (4) : 2–4.
- 桜谷保之, 2009. “テントウムシグッツ”. pp. 118–121. 日本環境動物昆虫学会・生物保護と環境アセスメント調査手法研究部会 (編), テントウムシの調べ方, 文教出版, 東京. 148 pp.
- 佐原ミズ, 2007–2010. マイガール 1–5 巻. パンチコミックス, 新潮社, 東京.
- 佐佐木幸綱, 1989. “瓢虫”, p. 380–381. 山本健吉 (編), 大歳時記 第一巻 (句歌春夏). 集英社, 東京. 531 pp.
- 佐々治寛之, 1985. “テントウムシ科”. pp. 245–270. 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 (編), 原色日本甲虫図鑑 III, 保育社, 大阪. 500 pp.
- 瀬戸口明久, 2004. “害虫観の近代”. pp. 286–306. 上田哲行編, トンボと自然観. 京都大学学術出版会, 京都. 505 pp.
- 高田兼太, 2014. はじめての文化昆虫学 – みんなで文化昆虫学の研究をしよう! きべりはむし, 36 (2) : 26–27.
- 高田兼太, 2010a. 文化甲虫学: 甲虫の文化昆虫学概説. 甲虫ニュース, (170) : 13–18.
- 高田兼太, 2010b. 甲虫と人間の文化 – コガネムシ科の文化昆虫学概説. 甲虫ニュース, (172) : 27–31.
- Takada, K., 2010. Popularity of different coleopteran groups assessed by Google search volume in Japanese culture – Extraordinary attention of the Japanese to “Hotaru” (lampyrids) and “Kabuto-mushi” (dinastines) (Cultural entomology). *Elytra*, 38: 299–306.
- 高田兼太, 2011. 甲虫と人間の文化 – ホタル科の文化昆虫学概説. さやばねニューシリーズ, (2) : 25–31.
- Takada, K., 2013a. Exploitation of flagship species of scarabaeid beetles with application of analyzed results on cultural entomology. *Applied Ecology and Environmental Science*, 1: 1–6.
- Takada, K., 2013b. Arrival of the Insect Movie Stars – Commentary on the animated movie “A Bug’s Life” from the aspect of cultural entomology providing insight for instruction of entomological knowledge, insect conservation and management practice. pp. 181–187. Costa Neto, E. M. ed., *Anais do I Simposio Brasileiro de Entomologia Cultural 2013*.
- Takada, K., 2013c. Ladybug-shaped chocolate on a mousse cake bought at a bakery in Amagasaki City, Japan. *Elytra*, New Series, 3: 195–198.
- Takada, K., 2014. Use of ladybugs as a urinal target in a water closet of a variety shop in Osaka, Japan. *Elytra*, New Series: 4: 313–314.
- 上田哲行, 2004a. “日本人はトンボをどのように見てきたか”. pp. 210–333. 上田哲行編, トンボと自然観. 京都大学学術出版会, 京都. 505 pp.
- 上田哲行 2004b. “現代日本人の自然観の構造 – 虫・カミ・ヒト・自然”. pp. 465–487. 上田哲行編, トンボと自然観. 京都大学学術出版会, 京都. 505 pp.
- Waldbauer, G., 2009. *Fireflies, honny and, silk*. University of California Press, USA. 194 pp.
- 遊鷹正秀, 2004. “俳句にみる自然観の変遷 – 昆虫にかかわる用法から”. pp. 377–407. 上田哲行 (編), トンボと自然観. 京都大学学術出版会, 京都. 504pp.
- Yurtsever, S. 2001. A preliminary study on the ladybirds (Coleoptera: Coccinellidae) of Edirne in north western Turkey. *Turkish Journal of Zoology*, 25: 71–75.

(2019年8月12日受領, 2019年11月30日受理)

【短報】フタスジヒメテントウを島後で採集

フタスジヒメテントウ *Horniolus fortunatus* (Lewis, 1896) は, 長崎から得られた 1 個体を基に記載された比較的稀なテントウムシで, 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州), 中国, 韓国から記録されている (Jung *et al.*, 2019).

中野・阪本 (2018) は, 愛知県においてイヌシデの樹幹から夜間に複数個体を採集していることを報告し, 城戸 (2014) は, 本種をカナクギノキの樹皮下から採集し, 「大木の幹をはっているものを見ることが多い」としている. また, 韓国ではケヤキの幹から採集されたとのことである (Jung *et al.*, 2019). 分布については, 西日本で確認されることが多いようだが, 山内 (1996) は青森県からの記録



図 1. フタスジヒメテントウと確認されたナナカマドの根際.